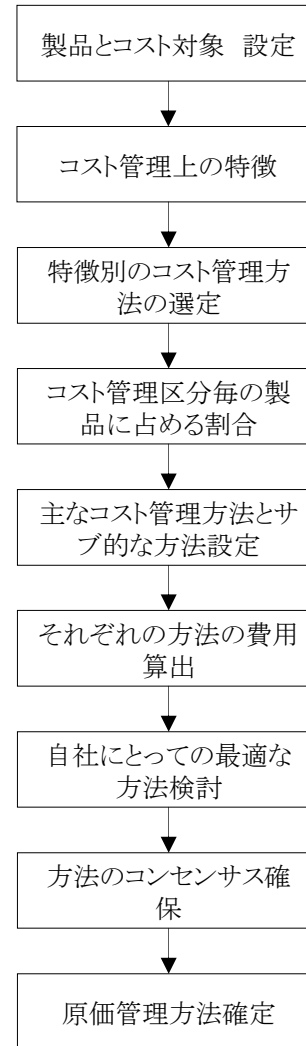


コスト管理は対象の特性によつて柔軟に対応する必要があります。例えばソフトウェアなどは、従来のモノコスト(部品の加工費等)のように、製造段階の発生費用を集計し、それに開発費用の配賦額を加えて製造原価とするような方法では、正確な費用は把握出来ません。ソフトウェアなど製造段階ではハードディスクへの書き込み程度であり、ほとんど費用としては発生しません。開発段階でほとんどの費用が発生しているはずですが、よつて開発費用を正確に把握することこそがコスト把握そのもので、ソフトの原価管理とは、開発管理そのものといえます。その他、表のように、様々な特徴をもつた領域があるにもかかわらず、ほとんどが一律的なコスト把握、コスト管理がされているのも事実です。

単一の企業内でも、これらの組合せが存在しており、どこまで詳しく行うかは、そのための労力との関係で決めなければならぬでしょう。

また原価算出方法の切り替えには、経理部門の納得が必要な場合が多く、管理会計として必要な立場と財務会計としての立場があり、両者の納得のいく話し合いが望まれます。

展開ステップ



コスト管理の例

環境変化	課題	検討例
ハードからソフトに比重が移ってきている	ハードは開発費より製造費用が格段に大きいため、開発費は配賦でも誤差は少ないが、ソフトやコンテンツは開発費のみである	ソフトの原価企画
標準化、共通化の定量的効果算出が難しい	標準化は、生産数量効果に加え、都度設計費・品質の向上、保守部品在庫の最少化、保守作業の等の間接的な費用効果が大きい	標準品の原価評価
単品ビジネスから商品群での総合的な勝負になってきた	部門間、企業間を合わせた損得勘定が必要で、どこで損してどこで儲けるかの判断が必要である	商品群の利益管理
リサイクル法等のライフサイクルコストが重要になってきた	ライフサイクルを通した原価による製品群別利益管理が必要である	ライフサイクル原価管理
サプライチェーンの差が競争力になってきた	サプライチェーンコストを製品群別、チャンネル別に管理できなければ、ビジネスモデルの設計が出来ない	ビジネスモデル原価企画管理